第25号 2003年6月28日

早期釈放!重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう!



目次

- P 3 独居より⑮ 「ロード・マップ」の次は「信託統治」ですって! 重信房子
- P 7 プリズナージャーナル 24 検察側尋問への丸岡修証言2回目 重信房子
- P16 いま情報の傘が開く カラス天狗
- P19 重信さんとの交流コーナー
- P21 投稿 米国の喉元・メキシコ 榎本武揚の夢の果て 小林 忍
- P22 読者からの声
- P22 シゲに捧げる「私小説」その22 山田美枝子

重信房子さんを支える会

独居より 6月110-150

「ロード・マップ」の次は「信託統治」ですって!

重信房子

6月11日 『オリーブの樹』24号受取りました。 ありがとうございます。

6月に入って、この間、サミット、パレスチナ・イスラエル・アメリカによる中東和平アカバ3首脳会議、日本では、有事3法の6月6日の成立(6月6日は、朝鮮戦争直前に、マッカーサー占領軍の指令によって、レッドパージが行われた「6・6追放」の日ですね。奇しくも?!)。さらに、戦争地域に"戦闘しない(?)自衛隊を派遣する"「イラク新法」を通過させようなどと……。めまぐるしく世界の基準がひっくり返っているようです。世紀を越えて「ジャングルの法」から「国際協調」や「国際法」を導いてきた人類の共存の英知は、9・11を経て「力を法とし秩序とする」アメリカのブッシュ政権によって世界が振り回されてきました。

アフガニスタン、イラク侵略と占領、そしてブッシュその人を飾り立てるためのアカバ3首脳会議。この3首脳会議は、決して、イスラエル、パレスチナ問題の矛盾を解決するスタートラインとならず、ブッシュ政権が「古い欧州」を初めとする世界に、唐突に力の誇示を表すものでしかないのです。

「ロード・マップ」案自身、出発点から公正さを欠いたものであり、EU、ロシア、国連、米国の4者で作ったものながら、ブッシュ政権は、イラク占領まで発表を控えさせ、サミットを経て「ブッシュのアメリカ」を盛り上げるための素材のように扱われています。決して、中東のためでなく、アメリカ、ブッシュ政権のためのものでしかない植民地支配の再現として、中東の人々には映っているでしょう。

これらは、イラク民衆の反米闘争の恒常化のみならず、新たに、パレスチナとイスラエルの矛盾を激化させる方向へと、火種に油を注ぎこむようです。そしてさらに、その結果は、「力を法とし秩序とする」自惚れたアメリカの関与政策、占領政策をパレスチナへとさらに広げるものとなるのでしょうか?

アメリカ史上、初のユダヤ系アメリカ人の駐イスラエル大使として、クリントン政権の政策決定に関わってきたマルティン・インディックは、早々に、「ロード・マップは、いずれ失敗するのは目に見え

ている」と、「信託統治」をポスト「ロード・マップ」 として既に主張しています(『論座』・7 月号のフォーリン・アフェアーズ)。

彼自身オーストラリア・ユダヤ人で、イスラエル に学生として留学し、その後アメリカに移民して、 クリントン政権誕生に中東政策立案で貢献して、大 統領選の勝利の後、就任式の前にアメリカ国籍を与 えられた人物です。これまで、アメリカはアラブへ の政治的配慮から、ユダヤ人を大使に起用してこな かったのですが、彼は国籍を取った後、あっという 間に大使としてクリントン政権で登場してきたので、 中東では、大いに週刊誌をにぎわせた人物です。彼 は、"パレスチナ側に、責任を取れる交渉パートナ 一が居ないので、「信託統治」によって、その主体 (つまりは、イスラエルの安全保障の実現のための パレスチナ人管理の主体)を育成すべし"と言う 考えのようです。

かつて、20世紀初頭、英仏露で、アラブの分割支配の密約がもたれました。国連のパレスチナ分割決議まで、今のイスラエルを含む全パレスチナは、イギリスの「委任統治」下にありました。今度は、この21世紀に"全土"でなく、"パレスチナ側"だけの"米国主導"の「信託統治」ですって!?「信託統治が、アメリカ主導型の構造であることが、イスラエルにとって、その枠組みを受け入れる前提となる」と、当然のように、平然と、マルティン・インディック氏は語っています。彼はイスラエル大使ではなく、駐イスラエルの米国大使だった男ですが。

アカバ首脳会談は、前大使の彼が「ロード・マップの失敗は、目に見えている」と言ってのけているように、成功していません。それは、彼が言うパレスチナ側にイスラエルの安全保障を実現する"責任あるパートナーが居ない"のではなく、歴史的にも現在的にも、公正と正義が実現されていないからです。アカバ首脳会議後「占領と入植が続く限り、我々の闘争の大義は存在し続ける」と、パレスチナ武装人民勢力は宣言しています。何故なら、イスラエルの占領、歴史的な植民地支配によって生まれた原因に、アカバ首脳会議が何も触れていないからです。

2003. 6.17.

しかも、アカバ首脳会議でシャロン首相は、現実的な解決を示さず、「武装闘争の停止」によるイスラエルの安全保障を強いたことだけが「現実的アプローチ」となって、パレスチナ側をがっかりさせました。シャロン政権は、入植は続けたまま、「違法入植地」として、無人の入植地を少し片付けて見せただけです。しかも、その上、昨日の10日には、政治指導者にミサイルの暗殺攻撃でお見舞いし、50人以上の一般市民を巻き添えにしました。

アッバス首相が話し合いによって武装解除させる相手の政治指導者を暗殺しておいて、"さあ、アッバスよ、テロリストを捕まえろ! テロリストには、話し合いでなく、逮捕投獄だ!"と主張している姿を見ると、和平が都合が悪いのは、イスラエル側だということが、徐々に世界の人々に明らかになっています。占領による人権無視、虐殺の数々が、この地域の矛盾であり、和平が成立しない原因であり、妨害物だからです。

アッバス首相も「平和のための政治プロセスを破壊するテロ行為だ」と、ミサイル暗殺攻撃を非難し、ブッシュでさえも、面子を潰された格好です。永続的な和平の相互の「対等な」話し合いは、オスロ合意であれ、「ロード・マップ」であれ、"イスラエルの危機"を作り出すことを彼らは知っています。

この地域の矛盾と問題を解決するために、イスラエル自身の占領をやめさせることです。いくつもの占領と暴力を非難する国連の決議を無視して、許されてきたイスラエルに対し、制裁によって国際社会が強制力を持つことを阻止しているのは、アメリカの力です。イスラエルの制裁をこそ行うべきですが、これが逆にまた作用していくのでしょう。不思議にも! こうなれば、益々段階的合意の積み重ねのような、パレスチナ人を交渉の「対等な」当事者として扱う相互主義ではなく、イスラエルの安全保障に従うことを「秩序」として教え、「信託統治」は、強制する措置として、あるいはパレスチナ占領政策として、現実的に語られるでしょう。

インディックの描くパレスチナ信託統治の見取り図とは、"アメリカ主導型の信託統治機構の下、米軍の指揮統制下にある特殊部隊その他を、国際部隊として活動させる必要がある。これらは、平和維持部隊でも、監視部隊でもない。むしろその任務は、秩序を維持し、テロを押さえつけ、パレスチナ治安部隊を再編、再訓練すること、つまり、現在のアフガニスタンで米軍が担っているような、役割を果たすことである"と、述べています。

問題はイスラエルの占領であるのに、このようにすりかえられています。それが実現するかどうかは、別問題ですが。アフガニスタン然り、イラク然り、国際法と国際協調の欠けたアメリカの「力の法と秩序」は、既に綻びています。

かつて野蛮な植民地収奪を経て、何世紀もかけて導いてきた国際秩序は、多元的共存を前提とした 国際法であり、人権規約であり、ポスト冷戦として、 その価値に基づく南北問題の解決が求められる 21 世紀時代に、アメリカは"リヴァイアサン"として君臨する先祖帰りへと、世界を再構成しています。

けれども、ホッブスの時代と違うのは、知識・情報は一般化し、民衆は人間にとってより良い生活や暮らし方を求める能力を培ってきたことです。

力の法と秩序の時代にたち戻ろうとするブッシュ政権は、もぐら叩きのように闘い続けることによって、睨みを利かせることで精一杯となるでしょう。そうして無駄な人的、物的、時間的人類の損失を経ながらも、世界の良識は優り、人権の価値に基づく相互関係を国際法と国際協調の中で、再び、国際秩序を求めようとするでしょう。

その間に、正義を独占する傲慢さと自惚れた支配者の運命が例外なくそうであったように、ブッシュの政権に巣食う集団は、自らの内に腐敗と崩壊を育てることになるのでしょう。そして、逆に試練の中で、抵抗運動の中から、正義を求める公正な中東の法と秩序と民主主義が育っていくでしょう。

そんな歴史的にも、現在的にも、正義性も正当性も無い占領者に加担し、戦争地域に"戦闘しない部隊"の派遣とは……?小泉政権は、歴史上もっとも危険な日米関係を築きつつあります。今や、イニシャチブをもって米国の軍事戦略の中に地位を得たいという、憲法前文にある国際社会に得たい地位と全く違うものに成り変っています。有事 3 法からイラク新法へと実体化し、「足かせ」になっている憲法改訂へと進めようとしています。

日本国憲法の通りに国際関係を実現する、勇気 ある政治指導者こそ求められているのに……と思 います。それが日本を救うばかりか、先祖帰りする 暴力と植民地化の時代に、知性と多元的共生の理念 に基づく国際秩序を求めることになるのに。そして それは、日本の第2次世界大戦以前のあり方を、真 に止揚する尊敬と信頼される国としての位置を占め ることができるのに。

そんな時代の転換の中で、独房では、何も出来 ないけれど、声を上げ、パレスチナのアラブの友人 たちへの連帯を叫びたい今日です。

『オリーブの樹』 2 4 号の中の辻邦さんの文を 読みました。『イスラエル兵役拒否者からの手紙』 について書かれていて、私も『オリーブの樹』 21 号で同じ本について触れたのを考えつつ、読みまし た。

辻さんは、この運動に関わる人々の勇気に敬意 を払いつつ、パレスチナへの連帯やイスラエルの国 家そのものに異議申立てを持てないこれらの運動の 限界について指摘しています。

そうであったとしても、そこから可能性が育つこと、育てるような関係へと糸口を求めるという考え方に、私は立ちたいと思います。不十分は、十分への一歩として、前向きにとらえて行く考え方に立ちたいと思うからです。かつて、本質論や理念で、「不十分を指摘」していたに留まってしまう、自己の視座の向きを変えて、「不十分を肯定」する視座から世界や人々が変わる道を見続けるようにと。

6月9日、房内に鏡が配布されました。夕食直前に、10センチ×20センチの四角の手持ち鏡です。これって、旧房の壁にはめ込まれていたのと同じですが。「立てかけないこと。棚の定位置に置くこと。夜9時以降は、机の上に置いておくこと」などなど、一つの鏡にたくさんの注意事項です。「立てかけずだと、片手しか使えないの? 髪止めたり、両手を使う時は立てかけないと鏡使えないじゃない?」と言ったら、「机に置いて覗き込むように」と言うので、「それじゃあ、髪を梳かすことにならない。下向きになる!」と言い合いました。あくまでも立てかけ禁止とか。「でも使う時は、やっぱり立てかけて置くしかないのに。すぐしまうのなら良いんじゃない?」一つの鏡で大論議。

とにかく、やっと、そんなプロセスを経て受取った鏡を久しぶりに覗き込んで、白髪、皺に改めて 驚きつつ、すぐにしぶしぶ納得している今日この頃です。

お礼の方法が無く、そのままにしましたが、前に救援連絡センターに衣服を送ってくださった方、ありがとうございます。今着ていて思い出してお礼を言います! 獄中のみんなで分配して頂きました。また、「ばら色」という色が在ったことを思い出させてくれた、みごとなばら色のバラを、Uさんありがとうございます。お身体は大丈夫でしょうか?

大学時代の友人の黄色のバラもありがとう。グラリオサの花ありがとう。密封パックに居ることに同情して、花の差し入れがたくさんありました。励まされつつ、匂いの中で、目を閉じてあっちこっちと、世界旅行をしている日々ですが、今は中東の戦場が気になっています。

6月12日 朝、投函用の封筒の表書きをしている時に、今日の朝刊を受取りました。「自爆テロ16人犠牲」の一面白抜きの文字が目に飛び込みます。

パレスチナ側に制裁や強制をもたらす「ロード・マップ」案のダブル・スタンダード(対等の相互主義のようにふるまいながら、パレスチナの民族の受難ナクバを永久化するためのアメリカとイスラエルへ服従を強いる統治)に対して、他の国際社会による相対化なしに和平は遠ざかるばかりです。アメリカも成果なき責任からは、逃れようとするでしょう。何故なら、イスラエルに圧力をかける役は、ブッシュの大統領再選にも不利になるからです。

この現実は、力による支配をグローバルスタン ダードとして、許すのか?それとも多元的国際秩序 を前提に問題を国際協調の中で、解決し続けるの か?という、世界の私たちひとりひとりに、価値観 を問うていることでもあります。

6月15日 曇り少し雨みたい。6月15日が晴れたのを知りません。60年安保の時の6月15日が雨だったように。樺美智子さんに哀悼。闘い、彼岸に行った人々に合掌。

6月28日に、もとブント議長だった仏徳二さんを「偲ぶ会」がもたれるとのことで、謝罪と哀悼をこめて69年7月6日のできごとを、6・15の日の今日、私自身の記憶の中から、ノートに記してみました。

この日は「7・6事件」として、後に歴史的な日となったのです。当時、69年4月28日の国際反戦デーにむけた予防措置として、4月27日破防法攻撃が中核派とブントに対して仕掛けられました。その矛先は、当時ブント議長だった仏さんと、全学連の久保井さんでした。余儀なくその後地下潜行した当時のブント議長に対して、後に赤軍派を名乗る人々が7月6日、明大和泉校舎を襲撃して、居合わせた仏さんらに自己批判を迫り、暴力を振るいました。その暴力沙汰に機動隊警察が介入し、その結果、負傷した議長を逮捕させてしまったのです。このことは、赤軍派の誤りをはっきりと示していましたが、

直後に他のブントの中の叛旗派に逆襲されて、後の 赤軍派の議長となる塩見さんらが拉致されたことに よって、泥沼化してしまいました。

ブントは、組織としてはだらしないまでも、個々人を尊重した運動体としての組織の良さを持っていました。当時のベトナム反戦の高揚を背景に、武装闘争を焦眉の最重要課題と考える戦術上の違いに対して、後に赤軍派を名乗る人々が、暴力を自己の独善を押し通す武器としたことによって、ブントを組織として解体に向かわせました。

この赤軍派の出生前の誤ったあり方が、赤軍派のトラウマを形成し、赤軍派結成へと至り、その唯一の自己正当性として、武装闘争に純化していく道を再生産し、連赤へと至らしめました。

この出生におけるあり方を、立ち止まり、問い返し、ブントとして問うことがあれば、ブント自身の再生の機会ともなったでしょう。しかし、ブントもまた、赤軍派に逆制約されて、武装闘争の実践論へと一面化し、組織を損なっていきました。受験や資本主義社会の競争の論理は、また、左翼運動の根本哲学の動因でもあったのですが、無自覚に自らの絶対的正しさとして、正義を独占することに夢中でした。

この7・6事件によって、ブントの時代は変質しました。当時のベトナム反戦の闘いの中で、「これまでのままではやっていけない」という当時の多くの人々の共通の実感に、より左の戦術を提出する者が正義の代弁者のようになっていったのです。そして、「これまでのままではやっていけない」という中に孕んでいた良心をも流産させるように、組織化された暴力の実体化へとブントは解体していきます。

私もこの7月6日、ルビコン河を渡ったと、はっきりと自覚することができます。「7・6事件」を自らの誤りとして深く総括していれば、もっと違ったことになっただろうと、連赤の事実を知った時思ったものです。「7・6の不徹底」として、森さんが、7・6で自らが内ゲバに躊躇したことを「自己批判」して、暴力的解体へと進んだと判ったからです。「優しさ」や「自信の無さ」は、時として暴力の側に身を寄せることによって、正義の強固さと錯覚してしまうこともあります。

この7・6事件の後、後に赤軍派を形成する人々は、自己批判(権力に議長を譲り渡した結果を招いたこと。ただし、目指していることは正しいというような内容だったと思う)を一度ブント中央に提起しましたが、中央は「そんな虫のいい話があるか!」

と、怒ったとかで、狼藉を働いた塩見さんら数名を 除名すると言ったそうです。その結果、別党コース を歩むということとなり、8月末に、赤軍派が形成 されたわけです。

再び、7・6の季節を迎え、振り返る時、「仲間を幸福にできない革命にはついて行けない」、「自分は弱虫と言われても、人を殴れない」と言い放った人々の本当の強さを思います。

赤軍派は結成され、7・6事件と真面目に向き 合うことことができず、唯軍、唯武器主義の「連赤」 の方向を正当化し、そのための主体形成を暴力化し ていきました。

「連赤」が、「同志を殺してしまった」という事実は、当時の社会変革の中に、絶望的な思いを投げかけています。連赤は"夢"を奪ったからです。"夢"というものは、それを強く望み、努力することによって実現されるという目的意識性ですが、連赤は社会主義や革命なぞ起こりはしない、と、多くの人々に、これまでの道に背を向けさせる絶望のインパクトを社会に与えたと思います。

この絶望の深さを私は、知らずに過ごした分、何かが実感としてつかめなかったようです。私は、自分個人としては、親友を失い、仲間の起こした「連赤」の現実に絶望的であっても、パレスチナ解放運動の希望の中に、身がありました。必ず、解放できるという人々の願いに包まれていたことによって、夢を持ちつづけ、自らを問い返す機会を与えられながら、歩むことができたのだろうと思います。

ブントの人々、赤軍派以前の人々の友情や消息に触れるたびに、「大衆運動機関」でしかなかったブント、逆に言えば、そこにこそ価値のあったブントこそ育てるべきだったな……と、とらえ返しています。

「党」と考えた途端に、あの時はみな原理主義で、スターリンや日共を否定しつつ、また、同様の思考方法の中で、「無謬の党観」に立ち、正義を独占しようとしていたのが判ります。

反省を込めて、7・6事件をとらえ返す時、7・6によって、逮捕され、苦闘された仏さんの生涯を賭けた闘いに敬意を表し、かつての仲間の一人として謝罪と哀悼を送ります。

五月雨るる日続くままに 入梅の暦となりぬ我が胸も雨

プリズナージャーナル24

重信房子

第30回公判出廷記 5月27日 検察側尋問への丸岡修証言2回目 夏を感じる朝です みかられているのが見につきました 密修正くの

数日前から今日の出延日が曇りだということはわかっていました。昨日には新舎もブルンブルンと揺れる地震もあったし、天候もずっと五月晴れのない五月のようです。旧房の時のように庭の草花の様子や若葉や野鳥たちのいる自然をながめる楽しみもなく、ルーバーのむこうの幅1cmの空の具合に曇り日を確かめています。

7時40分 呼びに来て、廊下を進んでエレベーター前で、手錠・身体検査。5人の同行者とともにエレベーターで地下1階へ。マイクロバスに6人と係員を乗せて出発。新舎の地下出入口から、工事中の脇の坂道を上がりながら地上に出ていく格好になります。工事現場を囲う鉄板の間から旧房が破壊されている様子が少し見えます。轍のある坂道の際にたくさんの数の雨降りアサガオが、鮮やかなうすいピンクの花をいっせいに付けて咲いているのが見えました。今日は雨、五月雨になるかもしれない。

にわか作りの工事中の囲いには、はみ出すように 雨降りアサガオやスズメノテッポウがたくましくか らみついています。旧房の軒下に寝ころぶ猫の脇に 花をつけていた雨降りアサガオや耳菜草が地面を被 っていた自然がなつかしい。小菅拘置所の門のあた りに来るとツッジがけたたましい色で咲き、緑の 枝々がふさふさの葉を静かに揺らしています。

高速道に入って荒川を見わたすと、どんよりとした空は霞が川面まで降りていて全体がぼんやりとしています。遠くの川辺に葦の穂かガマの穂か、えんじ色の花穂が緑の波より少し高めにそろって揺れています。とてもきれいです。荒川を越えて、小菅の下水処理場のあたり隅田川の川辺に一本の大きな泰山木か朴の花か、大きな白い花が天に向って咲いています。いつもなら見上げるはずの大きな木々を、高速の上から見下ろすと、若葉の先にうすい白い花をつけていたり、えんじ色の新芽が花穂のようだったり、樹々の違った表情が見えて五月のそれはまた趣があります。

隅田川沿いの高速は渋滞もなくスイスイと曇り空の霞む中を進みます。川沿いのブルーハウスも多く、 言問橋を越えたあと吾妻橋なのか真っ赤に橋が塗り 込められているのが目につきました。箱崎近くのデジタル表示は8:03で、17℃の気温を示しています。東銀座から高速を降りて銀座通りを直進します。メトロの出入口からはき出された人々が手に手にカサを持って、朝の通勤へと前を向いて足早に歩いている朝です。柳は美しく、あちこちの垣やブロックにツツジの花がもえるような色を咲かせています。日比谷公園の垣にも刈り込まれたツツジ。新緑の木立が公園のなかをさえぎり、うっそうとして、夏を感じる日です。

「検事さん! 検事さんは敬称を付けてください」

104号法廷。今日も丸岡証人です。前回、体調がすぐれなかったことと、数日前貧血で倒れたと聞いて気になっています。

私の着席を待って傍聴の方々が入廷されました。 前回、あまりに痩せ過ぎてせっかくのあいさつも、 戸平さんだと理解されなかったらしいと、戸平さん は一番前の席に座って丸さんとの対面を待ちどおし そうに座っています。丸さんの妹さんも、丸さんの 友人たち、旧友や、私の学友たちも入ってきました。 前回は満席でしたが今日は少し空席があります。記 者席にも数人の記者が座っています。

「それでは開廷します。証人を」と、裁判長が促し、 今回は間をおかず丸岡さんが入ってきました。モス グリーンのジャケットにカーキ色のズボン、白のハ イネックのシャツ姿でキメています。また痩せたの ではないかと気になります。でも元気そうに傍聴席 を見わたし笑顔です。戸平さんもあいさつ。今日は 戸平さんの存在を認められたようです。旧友も顔見 知りが多く、本当に稀な再会のチャンスを、友もま た丸岡さんも噛みしめている空気がみなぎります。 「はい、証人の丸岡さん、ひきつづきお尋ねします が、宣誓は生きていますので。それでは、お座りく ださい」と裁判長が言いました。そして前回にひき つづいて西谷検事からの反対尋問がはじまりました。 検事が「西谷からお尋ねします」と、言いはじめ

ると丸岡証人が、「ちょっと言わせてください」と さえぎるように同時に声を発しました。

丸岡証人「医者に言って薬を減らしてもらってい

ますので、今日は大丈夫です。前は利尿剤の量が多く、そのために血圧が下がっていました。検事さんにお願いしたいのは、もし私が質問と違うことを答えたり、ロレツが廻らないときは言ってください」と言うので、検事も苦笑い、傍聴席もドッとわきました。.

丸岡証人「それと、私は身内なので"重信"とか"足立"とか呼び捨てにしていますが、検事さんは敬称を付けてください」また、みんなドッと笑いました。

西谷検事も苦笑いしながら、「ハイ、外人は、ア ブハニはアブハニでいいですか?」と聞かれて、丸 岡証人は一瞬考えて、「それは、いいです」と答え ました。

虎頭弁護士から、「前回、耳鳴りがして、左耳の 方が聞きにくいということでしたが、姿勢をかえる 必要はないですか?」と尋ねました。ちょうど検事 の質問は左側から入ってくるからです。「今日は大 丈夫です。東拘側に言って、なんとか薬をおさえて いますので」と答えて尋問がはじまりました。

アブハニ部局とのコンタクト

西谷検事が「まず前回のドバイ事件についての質問につづいて聞きます。ドバイ事件にアシェン(アブハニと共闘していたとされる非アラブ組織の代表)の関与はあったのですか?」と質問しました。丸岡証人が「答えたくありません」と答えると、「アシェン・グループはドバイ事件の犯人の釈放ということに関心があったのでしょうか?」と、つづけて質問しました。「答えたくありません」と言ったので、質問をかえました。



西谷検事「ハーグ事件が起きた74年9月までの間、アブハニ (PFLP軍事部門のアウトサイドワークの責任者) と重信被告人の二人はどのくらいの頻度で会ったり、連絡を取り合ったりしていたんでしょうか?」

丸岡証人「担当者ではないので、直接的な関係はなかったはずです」と答えると、その「担当者でない」という意味やアブハニが軍事行動を行うときに、被告人に連絡を取ることはないか? とくりかえし質問をつづけました。さらに西谷検事は「ちょっとくどいようですけれども、アブハニが軍事活動を行うときに、重信被告人に連絡を取って、アブハニの指示に沿って被告人があれこれ人の動きを差配すると、そういうこともなかったいうことですか?」と質問し、「なかった」と言うと、「それでは、他の日本人とアブハニが軍事活動を行うとき、連絡を取ることがあるのか?」とか、「アブハニが軍事以外の活動を行う際に、重信被告人と連絡を取るということはあったのか?」と聞きました。

「軍事以外の場合は、ほかの政治局など確認のうえで、連絡を取ることはあったと思います」と言うと、「それはどういう場面か」とか、「Yさん (ハーグ闘争で奪還され、昨年本法廷で証言した人物) 証言で、『アブハニが被告人に金を借りようとした』とあるのだが、そういうことはあったのか?」、「たとえば、ムガベル (アブハニの指揮下で活動していたレバノン人) を通じて、アブハニに連絡を取るということはあるんですか?」、「証人がいたときには、ヨーロッパ担当はムガベルではなかったのか?」などと、アブハニ部局とどのように日本人が連絡を取り合っていたのかを質問していました。

アブハニの作戦のやり方についての質問

さらに「ちょっと質問が変わりますが、アブハニ の軍事作戦に外国人の共闘組織とか、あるいはボランティアが参加する場合、作戦の内容についてたと えば外国人の共闘組織のリーダーとか、あるいは作戦のキャップに指令された外国人とかが、事前にアブハニと作戦の内容について意見交換したり、議論したりはしないんですか?」と聞きました。

丸岡「そういったことは、いっさいよその組織の 人に教えないというのを原則にされていた方でした から、その具体的な内容を私は知りません」

検事「たとえば、作戦の実行方法とか、ランディング(航空機の着陸のこと)とか、そういうことでアブハニと議論したり、意見を述べたりということ

はないのか?!

丸岡「私が申し上げたのは、たとえば外国の組織 あるいは外国の組織の指導者と会って、こうこうこ ういう話をしているとか、そういった話をそれ以外 の人間、私に対して話をするということはないとい うことです。そういうことを話さないのが彼の原則 です!

検事「じゃぁ、共闘組織のリーダーとかあるいは 作戦のキャップに指名された人間とアブハニとの間 では議論は行われるのか?」と、さらに聞きます。

丸岡証人が「ケースバイケース」と答えると、「以前の証言ですと、たとえば和光がキャップだったら、和光が日本人のメンバーを人選できるんだと。数少ない権限と言ってたが、人選をまかされたキャップというのは、作戦の内容というのは事前に知っているか?」などと質問しました。

さらに検事は「軍事作戦がうまくいかない場合にはどう対処するのか?」など、「作戦が予定どおりにいかない場合、アブハニが軌道修正を行うのか?」とか、「人を出している共闘組織とか、ボランティアとかのリーダーがアブハニと議論したり、意見を言うことはあるのか?」など、アブハニの作戦のやり方について質問しました。

また「作戦の実行と交渉を分けるメリットはどこ にあるのか?」と、一般論として聞きました。丸岡 証人は「PFLP・アウトサイドワークの作戦では、 当初、作戦部隊に交渉権限を持たせていたが、それ が重なるとイスラエルや西側諸国も体制をとって時 間をかけ、要求を引っ込めさせるとか、降伏させる ということになってきた。それを克服するというこ とで、新たな戦術としてドクターが立てたのが、作 戦部隊に交渉権限がなければ、相手国が交渉できず 一方的通告しかないので、交渉ができにくくなると いうことで、70年代に入って、77~78年当時 までずっとそういう戦術を選んでいたみたいだ」と 答えました。そして、その実行部隊と交渉を行う者 との連絡というのはどのように行うのか? などさ らに聞いて、丸岡さんより暗号で行うことなどが語 られました。

検事「そうすると、その行動パターンを決めて、 それを暗号化して事前に実行グループと交渉役で了 解しておくというのは、ハーグ事件も同じなんです か?」

丸岡「ハーグのときは、よく覚えていないんですけど、暗号で入れるといったのか、連絡をするといったのか、どっちかだったと。和光君に聞いた方が

いいと思いますけどし

検事「総括会議で、何か暗号がうまくいかなかったとか、そういう話は出ていないのですか?」

丸岡「出たのは、交渉部隊から連絡をする手段を どうも決めていなかったみたいです。だから和光同 志たちは、要するに相手国を通して入るのか直接電 話が入ってくるのかというのを、想定していたみた いです。だからスペシャリスト(通称カルロス。ア ブハニ指揮下で活動していた非アラブ人)の作戦ミ スだと思います」と、答えました。

さらに投降地について、事前に受入れ国と交渉することがないと言っていたが、作戦が開始されたあとはありうるのか? と聞き、「ありうる」と答えると、「交渉したけどまとまらないときは、どうするのか?」などとさらに聞くので、「いや、それはちょっと、ドクターからそこまでは聞いたことないですね」と答えました。「そういうところば、あんまり考えないんですか?」と、西谷検事。

丸岡「具体例でいうと、ハーグのときのいわゆる アデン(当時の南イエメンの首都。ハーグ作戦部隊 が、最初に向かった着陸地点)の着陸うんぬんのと きは、交渉する時間がなかったというふうに、ドク ターからは説明を受けています。スペシャリストの 方から、何月何日にはじまるという連絡が事前に入 っていなくて、ドクターも事情がわからず対応でき なかった。それともうひとつ、部隊がアデンで粘っ てくれれば、時間的に間に合ったけれど、粘らなか ったので、交渉がうまくできなかったと後日聞きま した。具体例で言いますと、そういうことです」と、 当時の具体的なアブハニ、カルロス、アデンとの交 渉の姿を描く質問がつづきました。

"翻訳"作戦に関しての質問

「つぎに"翻訳"作戦(74年夏に、計画されていたとされる要人誘拐作戦)について、"翻訳"作戦が立案されることになったきっかけは何か?」と、西谷検事は質問しました。

丸岡さんは「伝聞だが」と断わったうえで、「一つはTさん(74年8月にフランスで逮捕されたひとり。当時日本赤軍と共同していたとされている人物)らの、アジアの運動支援国際連帯をさらに拡大していくうえで資金が必要とされたこと、それとちょうど第1次石油危機で、日本では商社による買占め騒動とかあり、商社に対して政治的に制裁する必要があるんじゃないか、という話が出たのがきっかけだ、といういうふうに私は記憶しています」と答

えました。

「そうすると、そもそもの最初というのは、T氏が 支援する民族解放闘争の資金獲得? それとともに 日本赤軍の自立。当時二つの目的か?」と、聞きま した。「2番目がどれぐらいの重点があったかどう かは、ちょっと思い出せないです」と答えています。

さらに検事は「誘拐作戦を行うと最初に言いだしたのは誰になるのか?」という質問に、丸岡証人が「答えを差し控える」と言うと、「じゃ、誰が持ってきたかは別にして、話を持ってきた相手というのは重信被告になるんですか?」と質問しました。

丸岡「ヨーロッパの人たちとの対応をしていたの は被告だから、必然的にそうなったと思います!

検事「その結果、重信被告人に話が行ったという ことになるわけですか?」

丸岡「と思います」

検事「以前翻訳作戦で軍人たちの一部で仲が悪かったりしてうまく事が運ばなかったという証言ですが、この軍人というのは?」とか、具体的な内容を求めました。証人が「Yさんと和光さんが、単純に性格が合わない」ということを告げると、「具体的にどう事が運ばなかったのか?」などと、質問をくしかえし、「その結果として重信被告が積極的に動いたのはなぜか?」と、質問していました。

検事「"翻訳"作戦には、アブハニは関与してい ないんですか?

丸岡「していなかったはずですけど」

検事「まったく関与していないんですか?」

丸岡「そのへんのところは、たとえばY君がどういうふうに交渉していたか、そこはわからないです。 Tさんもドクターとも知り合いであったから。ただ その当時、総括といっても、結局ハーグ勝った勝っ たで浮かれていましたから、そういう一つ一つ事例 を洗っていって、ここにこういう問題があったとい う総括はやっていないです!

検事「もしアブハニが関与して作戦が行われたとして、それでアラブ赤軍の自立のための資金獲得という目的は達成できるんですか?」、「やっぱりドクター抜きでやろうというような動きというのはなかったでしょうか?」、「そのあたりの具体的なプロセスというのは、総括会議では出ていないということですか?」と質問をつづけました。

丸岡「"翻訳"も、最大の問題はYさんが拘束され、Tさんたちが自供してしまったと、そちらの問題にパァっと流れてしまっていましたから、そういう立案からその準備過程の問題とかいうのを、緻密

に一つずつ洗っていくことはしなかったです」と答 えています。

7 4 年 8 月の丸岡証人の行動について

西谷検事は、その後、丸岡証人が8月7日~8月11日くらいの間に、ダマスカス経由ベイルートに入り、ドクター・グループの友人のアラブ人に会った、と前に証言していたことについて、「和光氏は居なかったのですか?」と質問しました。丸岡証人は、当時は顔見知りでないので、居たか居ないか確認していない、と答えました。

さらに「当時ベイルートにムガベルは居たんですか?」、「ムガベルと和光氏とはどういう関係になるのですか?」と質問しました。

丸岡さんが、「当時、ドクター・グループとの責任はY君が取っていたので、和光君がどういうふうに連絡を取っていたのか、そこまでは報告しあっていない」と答えました。さらにバグダッドに戻ってアブハニの事務所でアブハニに会ったときのことを、検事は質問しました。

「どのように事務所で会うことを決めたのか?」とか、「アブハニとの話のなかで、カルロスをチーフにして和光をキャップにすることを考えていると話していたということだが、その理由について何か言っていなかったか?」、「証人はこのY奪還作戦への参加について志願しなかったのか?」とか、「以前にY奪還作戦に関与するつもりはなかったと証言していましたが、なぜ関与するつもりがなかったんですか?」などの質問をくりかえしました。

鬼岡「事情がよくわからないのに口出ししたり、 乗り出せば、結局和光君の邪魔になるし、ドクター が自分の責任でやると言っている以上、私がでしゃ ばる必要性がまったくなかったわけです。それから、 ドクターからもバケーションを取れというふうに言 われてましたから」

検事「じゃ、たとえば実行部隊として奪還闘争に 参加しなくても、アブハニから他にこういうことを してくれという指示とか、あるいはこういう協力を してくれという依頼とかはなかった?」

丸岡「なかった」

検事「そうすると、アブハニはなぜ証人にY奪 還闘争を行う考えのあることを打ち明けたんです か?」

丸岡「それはジハード(上記Yのアラブ名)の件はどうなっているんだ、というふうに私が聞いたからで、何かあったらしいんだけど、どういうことか

と聞いて、実はこういう事態でこういう動きをしていると。だから具体的な内容はもちろん聞いていないんですけど」

「心配するな程度の話でもいいのに、カルロスがリーダーで、和光がキャップでとか話をしなくても」と西谷検事。「なんで証人に具体的に話したのですかね」と、くりかえしました。

丸岡証人が「それは私が要するに心配するだろうというので、日程の事情を説明するというので説明してくれたわけです」と言うと、検事はその質問を終えて、「先に闘争に付随して声明文の作成などに忙殺されるという証言があったが、どういうことでその作戦の声明を頼まれたのか?」とか、「声明はどう通常書かれているのか?」、「ハーグのときはどうか?」などの質問をくりかえしました。

そしてさらに「重信被告がバグダッドに居るかどうか、アブハニに尋ねたと証言しましたね。なんで重信被告の居場所をアブハニに尋ねたのか?」と質問し、「アブハニは重信被告人の居場所を把握しているのか?」、「重信の住居を把握していたのは、バグダッドに限ってのことか?」などの質問に、「はいそうですね。駐在者が限られていましたから」と、答えました。

ちょど開廷から1時間過ぎて2時10分になりました。30分の休憩を取って、2時40分から再開をしました。

リビアでのドバイ事件裁判

その後、戸平さんとバグダッドで会ったと証言したことを質問しました。そしてさらに、8月25日頃、バグダッドで庄司弁護士と会ったと証言したことについて質問をしました。

検事「庄司弁護士はバグダッドで会った際、重信 被告人と会ったと話していたわけですね?」

丸岡「ハイ」

「いつか?」という質問に、「日付は覚えていない」と答えると、「リビアのどこで会ったか?」と 質問し、「トリポリ」と答えました。

検事「重信被告がリビアに行った理由について庄 司弁護士は何か話していたのか?」

丸岡「それはリビアにいる日本人(ドバイ事件の いますか?」 実行犯として逮捕されていた日本人)がいちおう裁 丸岡証人が れるという形になっているので、裁判の弁護 か?」、「ベンと、引き渡しといいますか」 リポリに移さ

検事「今のは庄司弁護士がリビアに行っている意味じゃないですか?」

丸岡「いや重信も似たような理由だったと」

検事「重信被告が待たされて退屈とぼやいていた と庄司弁護士が話していたということですが、何に ついて待たされていたのか庄司弁護士は話していま したか?」

丸岡「それは当局との交渉だと思います」

検事「ドバイ事件の裁判というのは8月11日に、 リビアのベンガジで行われる予定だったということ ですか!

丸岡「そう聞いています」

検事「それで庄司弁護士はトリポリにいたという 証言ですけれど、裁判のためにベンガジには行かな かったんですか?」

丸岡「ベンガジに行ったかどうかは聞いていないが、行ってないんじゃないですか」

検事「庄司弁護士は、その裁判が開かれるベン ガジではなく、トリポリに滞在していたのばなぜな んですか?」

丸岡「そういった交渉の責任者はリビア政府が、 首都がトリポリだということと、アブ・イヤッド(P LO及びファタハの指導的メンバーのひとり)の事 務所もトリポリですから、だからトリポリに。ベン ガジで最終的に日本人に会えるとか、たとえば仮に 裁判というのが実際にあるとすれば、その裁判に出 席するということになれば、場所を移すと思います けど」

検事「そうすると庄司弁護士は裁判に出て、弁護 するというよりも、そのトリポリにいて釈放を交渉 するというような感じだったわけですか?」

丸岡「現実的には裁判問題というのは、PLO自体はまったく問題視していなかったので、あくまでもリビア政府との話ということが中心であったので、実際は裁判対策というよりも、PLOとの打ち合わせということが大きかったと思います」

検事「ベンガジの裁判ですけど、8月11日に開かれたものの、ドバイ事件の犯人たちは出廷しなかったというのは知っていますね?」

丸岡「ニュースになったから知っています」

検事「犯人たちはベンガジからトリポリにすでに 移されていたということのようなんですが、知って いますか?」

丸岡証人が「聞いている」というと、「いつなのか?」、「ベンガジの裁判より前に、ベンガジからトリポリに移されたのか?」を確認し、「そのトリポリで庄司弁護士は移されてきた"犯人"たちとは会っていないのか?」と質問しました。

丸岡「それは会わせないと思います。なぜかというと、あくまで日本政府向けにその裁判という舞台が必要なわけですから、その裁判のはじまる前に日本から来た左翼側の弁護士に会わせるということになると、日本政府のメンツに関わるので、それはしないと思います」

検事「そうすると庄司弁護士はいいとして、トリポリに交渉に来ているPLOの人間とか、あるいは重信被告とか、こういう人たちはトリポリに移って来た犯人たちとトリポリでは会わないんですか?」

丸岡「それは窓口がまったくちがうから。そういうことはしないと思います。というのは、たとえばそういう交渉とかはだいたい外務省とか、あとは革命評議会の対外工作部が担当するし、拘束された者たちは内務省の担当になりますから。それから事前にたとえばリビア政府が、じゃ日本赤軍と正式な関係を作りましょうという決定もされていない時点で、そういう会わせ方はしないです」

さらに「ハイジャッカーがすでに離れているのに、何日もリビアにいたのはなぜか?」とか、「裁判が8月11日で、庄司弁護士がトリポリから移動したのが8月17日ですが、なぜリビアに滞在していたのか?」などと聞きました。

74年9月のベイルートにおいて

「証人は8月30日前後頃、Y解放作戦のフォロー体制を作るために、ベイルートに入ったとのことですね。このフォロー体制は具体的にはどういうことを指してしるのか?」と質問しました。

丸岡「一つは政治交渉をすると言っていたんで、その経緯を聞くには、ドクターがバグダッドからすぐいなくなりましたし、バグダッドのドクターの事務所では、そういうことは報告受けられないですから。だからベイルートに行けば情報をもらえるのと、あとその政治交渉の経緯がわかれば、いわゆるフランス政府にとっての重大なる結果というのは、いつ頃はじまるのかというのは想定できますし、それもドクター部局の人から聞けるかも知れないというのと、あと、いざはじまれば例の声明といったこともあるという意味でのフォロー体制ということになる」と答えました。

そして、検事は74年9月になって、ベイルートで重信被告と会ったという証言に対して、「どう連絡を取ったのか?」とか、どこで会ったのか?とか、その話をしたのは、「イメージとして、あなたと1対1になってそういう話をしているのか、組織的部

門の人間やら何やらかんやら、いろいろな人間がいるところに重信被告がいて、そういう話をしているのか、どういう感じか?」と聞きました。

丸岡「2人だけじゃなかったと思います。あと1 人か2人いたと思います!

検事「それは誰なんですか?」

丸岡「ちょっと定かではないです。理屈でこじつければ、足立ともう1人いたかとは思いますけど」と言うと、「具体的にどんな話をしたか?」と、さらに聞きました。

丸岡「一つはPFLPとの関係性、PFLPとリビア政府の関係の仲介という目的もありましたから、それとの折衝で、回答とかもらうというのがあったということと、9月1日がリビアの革命記念日で、その時はたしか5周年記念日で、ぜひ出席しろという話を聞きました」

検事「出席したという話だったのですか?」

丸岡「TVカメラとかで映るので、結局出席しなかったと思います。だから式典には参加せずに、リビア政府首脳の人、ちょっとリビア政府に迷惑がかかるので申し上げられないですが、会って直接的に祝辞を述べるとかしていたようです」

検事「そうすると、9月1日の革命記念日には リビアに居たということですか?」

丸岡「ハイ」

検事「重信被告はY氏がパリで身柄を拘束された ということは、知っていたんですか」

丸岡「知っていました」

検事「これはいつ知ったかということについては、 話に出ていますか?」

丸岡「そこまでは」

検事「リビアに行く前から、もう知っていたよう な感じでしたか?」

丸岡「それは知っていたと思います。非常に心苦 しかったというふうに言っていましたから」

検事「T氏とか、山本さんとか、K氏。パリで身柄を拘束されたということは、重信被告は知っていたんですか?」

丸岡「それは知らなかったです」

検事「そうすると、あなたと会ったときも知らなかったんですか?」

丸岡「知らなかったです」

検事「ちょっと確認したいですが、最初に重信被告に誰が会えたかは別にして、リビアから帰ってくるまで、重信被告は丁さん、山本さん、Kさんらがパリでの身柄拘束されたということは知らなかった

ということなんですか?」と再確認していました。 「はい、知らなかったです。非常にびっくりしていましたから」と丸岡証人が答えると、(軍事交渉にいたる前の)ドクター関連の政治交渉には、かかわったのかどうかと、ただしました。「かかわらないです」と丸岡証人が答えると、「かかわれないということですか?」と聞きました。「かかわれない」と答えたうえで、当時の政治交渉では、PFLPの国際関係委員会に話を通してなかったのではないか、と答えています。

ハーグ闘争が始まって

さらに、その後ベイルートにいて何をしていたのか? 組織的部門のアパートと軍事的部門のアパートがあり、そこに被告もいて、何をしていたのか? などの質問がつづきました。そして、ハーグ事件が起きた後、たとえば皆で成り行きを心配して集まって話をするとかしないのか?と尋ねました。

丸岡証人「成り行きをチェックしていたのは、私と日高とG氏の3人で、定期的にBBCとイスラエル放送をだいたい2時間おきにチェックしていましたけど、組織的部門の方はそこまでチェックはしていなかったと思います。何か新しいニュースが入っているかなど聞いてはいたと思いますけど、皆で雁首そろえて心配顔しているというのはないです」

西谷検事「そして、74年9月、西川氏がバグダッドに戻ってきた後に指示文書を受取って、再びヨーロッパに向かったわけですね。この指示文書というのは誰が出したんですか?」

丸岡「ちょっと答えたくないです」

検事「じゃ、この指示文書は誰が西川に手渡した んですか?」

丸岡「答えたくないです」

検事「吉村さんじゃないんですか?」

| 丸岡「私本人のことではないので、答えたくない です」

そして、さらに二次作戦について、軍事的部門で ないGさんをなぜ加えたのか? どの程度、二次作 戦の条件と可能性があったのか? など聞き、

検事「それで、結論として、どういう作戦なんですか?」

丸岡「結論として、ヨーロッパの地中海にあるマルタは警備がゆるいですから、マルタかモナコあたりでの、フランスの権益に対するサボタージュ」の検討を行ったこと、またカルロスらがパリでドラッグストアに手榴弾を投げ込んだのは、支持できな



いし逆効果にしかならないが、ハーグの側面支援のために行われたと、後で聞いたと語りました。

検事「ちょっと話が変わりますが、ハーグ事件が 起きた時、重信被告はハーグ事件の早期解決のため に、PFLPに話をするとかいうことはなかったん ですか?」

丸岡「検事さんの方で、具体的に想定していただければわかると思いますけど、たとえば、早期解決で、ベイルートにいる人間がPFLPと話す内容というのはないわけです。それは、現実的に考えていただければ、おわかりいただけると思います」

検事「Y氏がこの法廷で証言したところによると、 たとえばその事件が起きて、日本人が主体になって やっているということだったら、ベイルートの日本 人は何か助けたいという状態になって、アルハダフ に殺到したり、何かやれとプレッシャーをかけるん だというようなことを言っているんですけれど、ハ ーグ事件ではそういうことはなかったんでしょうか、 という質問なんですけど」

丸岡「それは、ドバイとの関係でY氏は言っていると思うんですが。ドバイというのは、すでに事件が終わって、終わったところで、要するにどうもPFLPの責任でやっているはずというのが、違ったようだというので、アルハダフも含めて聞いた話では、アラファト議長の事務所にも押しかけたらしい。それとは違って、ハーグというのは、現実にそういう作戦が遂行されているので、それをどうこうしても、たとえばアルハダフのその時は、責任者がバッサン・アブ・シャリフですが、そんなこと言われて

も困るよ、ということになると思います」

検事「そうすると、ハーグ事件では、誰かが重信 被告に対して、PFLPに働きかけろとか、重信被 告の方でPFLPに働きかけるとか、そういう動き はなかったということになるのですか?」

丸岡「はい」

その後さらに検事は、戸平さんがヨーロッパからベイルートに戻ってきたときのコンタクトの仕方、ベイルートでの活動などを質問しました。戸平さんはベイルートに当時いたアジア人の対応をしていたなど、語られています。

シリアに作戦部隊が投降して

シリアに作戦部隊が投降した後、どういう経緯で、 誰がシリアを訪ねたのか?との質問に当時の状況が 語られました。シリアに着陸はしたが、歓迎されて いるのか否かわからず、シリアとの交渉ルートがな かったのでPFLPに相談し、PFLPを介して、 シリア系パレスチナ組織のサイカの議長と会い、サ イカの方もリッダ闘争を評価していたので、大歓迎 ということで、仲介してもらった、と。

丸岡「釈放交渉は、あくまでもPFLPの国際関係委員会とサイカの人がシリア政府と交渉するということで、われわれがその交渉団の一員に入ったということではないです!

検事「じゃ、釈放の見通しを知るために、組織的 部門の人間が行ったんじゃなくて、日本人を励まし に行ったみたいな感じですか?」

丸岡「というか、たぶん4人の連中、ニュースも



何もないから、ちょっと精神的に落着かないだろうから、行って落着かせたらどうかということで、行ったんだと思います!

そうしたシリア滞在を経て、2回に分かれて4人 が帰還したことが語られました。

検事からは、その他、4人が帰還した時に、「総括会議を行う前に、一部のメンバーで総括会議をどうするのか、方向性について議論するとか、大筋を決めてしまうとかいうことはあったのか?」と質問がありました。

丸岡「組織確立とか日本赤軍への改組とかは、私は9月から言ってましたし、すでに出ていた。ただ、総括自体は和光氏とかY氏の意見も聞かないといけないし、そのハーグ闘争自体を当事者抜きには語れない。その総括の討議を踏まえて、それまでベイルートで話していた内容を掛け合わせて、方針に反映させるという形だったと思います」

検事から、当時の総括会議が和光さんが戻ってくる前からはじまっていたのか否かとか、さらに作戦報告はPFLPに対して行われたのかどうかなどの質問がありました。

丸岡証人から、証人自身が総括会議の後、ドクターに、共闘原則ができるまでアウトサイドワークとの関係は凍結するということを報告に行ったことを 語りました。

検事は、作戦の後、報告をアブハニに行うのかどうかという質問をしました。そして、これまでの作戦では、作戦のリーダーはアブハニに報告してきたが、「ハーグ事件は証人が関係性を確認するため行ったので、報告のために行ったわけではないということになるのか?」と、質問しました。

丸岡「はい、シンガ(74年1月、シンガポールの石油基地を攻撃した闘争)、ハーグで共通しているのは、作戦まではドクターの指揮下であること。 違いは、作戦後もドクターの指揮下であったドバイ(74年7月、日航機をハイジャックし、ドバイで航空機を爆破した闘争)やシンガと、ハーグの後は、アデンに着陸できていれば、事態は違う形になったと思いますけど、シリアになったので、それでいわゆる共同武装闘争という形では切れたという形になりました」と、答えました。

閉廷と予定確認

4時になりました。

西谷検事が、時計を見ながら、「ここで休憩に入ると、総括会議に関して1時間くらいはかかります

が」と、どうしようか?というふうに、裁判長に尋ねました。

裁判長は弁護側に次回で最終質問が終わるかどうかと尋ねました。弁護側は、最終質問は多々あり、証人の体調の関係もあるので、次々回まで丸岡証人にはお願いしたい、と言いました。「それなら、今回はいったん打ち切って、次回は検事側の反対尋問ということにして、今日はこれで終わりましょう」と裁判長も言いました。

少し早めの 4 時過ぎに「それでは、今日は丸岡 証人結構です」と裁判長が促しました。ちょうど水 を飲んでいたところで、丸岡さんは看守に急き立て られました。

「ちょっと、水を飲ませてください。房に帰ったら、 水がまずいので」と、にこにこしながら、水差しの 水をプラスチックカップにまた注いで、飲み干して から立ち上がりました。

みんなも丸さんらしい仕草、言い草に笑っています。手錠をつける間に、傍聴席の人々とあいさつをして、みんなも最後まで元気そうな丸さんにほっとしているように、あちこちから手を振ります。旧友やアラブの戦友や赤軍派時代の先輩もいました。

「それでは閉廷します」と、傍聴人の退廷も促され ました。

Aさん夫婦、友人たち、もう数日後に控えたリッダ闘争の5・30のことを考えて、みんなに「ありがとう!」と、大声を出しました。たまにはいいかな……とあいさつしたら、「声を出さないで」と、看守たちに注意されました。

五月雨の帰路

4時50分頃、後方に女性たちが乗り、前方に男性陣の乗った大型バスの護送車が、地方裁判所の地下から地上に走り出ると五月雨。対面の日比谷の緑がみずみずしく、なんだか懐かしい風景にひょいと出会ったような雨が静かに降っていました。嬉しい気分。雨もまたいいか……。日比谷公園の緑に見とれつつ、晴海通りから日比谷パークビルを過ぎて、カーテンがあがると、雨の中に銀座が現れました。

有楽町のガード下に占いの台が一台、昔と同じように白い布をかけた机に卓上の明かり。不意に昔々の風景に頭がクラクラっとします。占い師は背広にネクタイですが、風情が変わらないのは、きっと同じガード下にいるせいでしょう。

銀座通りは、西銀座デパートも三越も人が一杯。 雨で柳がきれいです。東銀座の歌舞伎座の演目を一 瞬のうちに確かめ切れずに過ぎると、高速の入口に入るために左に折れます。折れた瞬間、大きな君が代蘭が豪華な巨大な鈴蘭のような花をつけています。秋にはのうぜんかずらの咲く一角です。この花の名前は左翼の人には受けないけど、子供時代に見かけたこの花について姉に手紙を書いたら、君が代蘭が小学校の二宮金次郎の銅像の周りに植えられていて、その針のような葉でチクチクとお尻を刺された記憶があると書いてよこしました。君が代蘭の並びに、エゴの木か白雲木が、樹に白い花が真っ盛りでした。この時期から6月、ことに樹々に咲く白い花はとっても見ごたえがあります。

隅田川に出ると、5:07、19℃のデジタル 表示が雨に曇っています。

リッダ闘争の5・30の近い5月。証言の中で丸 さんが語った、リッダ戦士たちと私の知っている彼 らの表情やガッサンのことを考えています。もうす ぐサミットがあって、パレスチナ、イスラエルの首 脳会議があって、イラク後の中東に対する、新しい 植民地支配がどんどん企てられてきそうです。企て は進んでも、実行が進むかどうかはまた別ですが。

19世紀も、20世紀も、21世紀も、レトリックのさまざまに隠された大国の武力支配と、それに迎合するアラブ人の上層の利害のために、いつも人民はわりを食わされてきたのだということが、いま、中東俯瞰図のようによく見えます。世紀が新しくなるごとに、違っていないのは、公正と民主主義を求め続ける限り、そのレトリックが大衆化され、普遍化されて、逆に、支配を目論む思惑をあからさまにして、さまざまな企てを飾る無花果の葉になり得なくなっていることでしょうか。

そんなことを考えつつ、バスに揺られていました。 無機質な房に戻ると、芍薬とアルストロメリアの 花。ありがとう。チョコレートも差し入れ。きっと これは浴田さんの采配でしょう。

入所以来27本目のボールペンの芯を変えました。

獄の坂轍の跡に鮮やかに

雨降り朝顔一斉に咲く

身体中觀となりて新緑を

食る我れは護送車の中 傍聴に静かに座る妹の 涼しき眼元兄と似ており

いま情報の傘が開く

カラス天狗

核の傘から情報の傘へ

梅雨である。インド洋で大量に蒸発した水蒸気が、 様々な人と自然のエピソードを生み出しながら東南 アジアを経て日本に到達し、恵みの雨となる。地球 規模の大規模なエネルギーと物質の移動という一大 ドラマが梅雨の背景にある。とは言うものの、やは り梅雨時はうっとうしい。傘を用意して外出しなけ ればならない日が続くとなんとなく気も重くなる。 今回のテーマ「情報の傘」は本物の傘が必要な日よ り格段にうっとうしい。

米・クリントン政権で国防総省次官補を務めたジョセフ・ナイは日米安保再定義の基本方向の枠を定めた「新防衛計画大綱」策定をリードし、米・外交問題評議会発行のフォーリン・アフェアーズに掲載された論文で「…米国の世界戦略にとって、日本に対する情報支配こそが核の傘以上に重要であり、そうすることで 21 世紀が米国の世紀であることが保障される…」と断言した。「核の傘」から「情報の傘」への大転換を謳いあげたのである。ナイはネオコン派のリチャード・パール委員長下の国防政策委員会を、彼らが構想を練っていた「全中東民主化・市場経済化計画」に対し「正気の沙汰とは思えない」と批判し、辞任している。

ネオコンのあまりにも稚拙な情報操作の裏で

イラク大量破壊兵器情報の捏造・歪曲疑惑が米 英政局を揺るがしている。ブレア英首相が議会を説 得し、国内の反戦世論を沈静化するために議会演説 で取り上げた「生物化学兵器使用準備完了までの所 用時間 45 分」、イラクによる核開発誇張などが「大 儀なき」戦争を正当化するためのものだったのでは ないかという疑惑である。しかも、証拠改ざんは情 報機関のミスや意図ではなく、政権中枢の誘導、圧 力によるものである疑いが濃厚になっている。

対イラク開戦前の 03 年 2 月初めに行われたパウエル・ストロー会談で、ストロー外相は、機密情報の多くは明確な事実や複数の情報源の話に基づかない推測や評価に基づいており、米英両首脳が主張している大量破壊兵器の存在は証明できないと述べ、パウエル国務長官もネオコン・ウォルフォウィッツ国防副長官の関係者からの情報に疑念を呈していたという。ウォルフォウィッツの情報源は亡命イラク人アフマド・チャラビイラク国民会議代表で、彼の

最大の支持者がネオコン急先鋒の元国防政策委員長 リチャード・パールである。パウエル・ストロー会 談を報じた英ガーディアン紙は会議内容を記録した 文書が存在すると伝えている。

ウォルフォウィッツ米国防副長官は記者会見での やりとりで「合衆国政府の官僚制度に関係する諸事 情から、誰もが納得できる唯一の問題に落ち着いた。 それが大量破壊兵器だった」と述べた。つまりは「大 儀なき戦争」であったことは明白だが、問題はそこ までして戦争を仕掛ける理由が何であったかだろう。 「全中東民主化・市場経済化計画」、米国単極構造 の宣言など複合的要因が背景にあると考えられるが 無視出来ない事実として以下のような事態の進行が あった。すなわち、経済制裁下のイラクでは米国は 石油を始めとした経済利権から完全に排除されてお り、そればかりか政治的にもイラクがシリア、イラ ン、サウジ、エジプトなど周辺国を巻き込みながら、 米国にとって影響を及ぼせない地域として、しかも その度合いを増しつつあった。米国の経済支配者達 がこれを看過できるはずがない。ネオコンを"鉄 砲玉"として一挙に事態の転換を謀ったと考えら れる。大量破壊兵器情報捏造がこのような背景を持 っているのなら、最終的には情報機関の誰かが責任 を問われ、事実は闇に葬られてしまうであろう。

対「テロ」機動戦を軸とした米軍展開

ネオコンを先兵とした"荒っぽい"やり方とは 別の"スマートな"情報操作、情報支配も進行中 である。

核の傘から情報の傘へ、21 世紀は情報支配の時代だというナイ・イニシアティブが、米軍の世界展開の大幅変更に伴って動き始めている。

03.06.09 付のワシントン・ポスト紙が伝えるところによると米国防総省のホーエン次官補は「戦略的課題は重大な破壊力であるテロリズムへの対処だ」と述べ、現在策定中の米軍配備について「軽装備で迅速な機動力を持った小部隊が世界各地に配備されることが必要であり、テロリストの訓練基地が見つかったら、1カ月や数カ月後の軍事展開ではなく、数時間以内に行動しなくてはならない」と海空での米軍の移動方法の根本的変更が狙いだと語った。その上で世界各地の主要な米軍駐留拠点のうち英国、日本で維持され、中東、アジアの大規模駐留軍は「小

規模な常設駐留部隊に分散配置されることが検討される」という。

実際、中東ではサウジアラビアを主軸とした駐留からカタール、クウェート、アラブ首長国連邦などへの分散配置が行われようとしているし、在独米軍6万人を6カ月ごとのローテーションでポーランド、ブルガリア、ルーマニアなど「新しい欧州」に分散配置することも検討されている。

在韓米軍は司令部があるソウル中心部の龍山基地 早期移転、別の基地 2 カ所の統廃合・移転が米韓 協議で合意済み。韓国の駐留も 6 カ月ごとのロー テーション化へ向けて動きだそうとしている。

加えて、沖縄、ハワイ、グァムの海兵隊第三遠征 軍をフィリピンに基地を再設営して配置することも 検討中であり、この目論みでアロヨ大統領を国賓と して招待した。オーストラリアには 5000 人規模の 駐留を計画し、米豪間協議を開始している。

在韓米軍の対北朝鮮前線からの後退は北朝鮮への 武力行使の際、米軍への影響を極力軽減する狙いで あり、欧州、中東での再配置は予想されるイラク長 期駐留と並んで、中東・中央アジア全域を射程にい れたものである。

在韓米軍再配置については後述するように、情報支配という側面を持つ。その他の地域への再配置は米軍が文字どおり世界の警察官となるという方針に基づいて計画されているとしか、それは各国の当該分野での主権の制限に帰結する可能性を持つ。それは、古典的金融資本主義に基づく古典的帝国主義の時代、IMF・GATT体制下の新帝国主義の時代に続く新たな帝国主義の時代の幕を開けようとするものである。冷戦構造崩壊から約10年、米欧金融財閥は米国単極構造の中で新しい支配の構造を掌中に入れようとしている。

集団的自衛権封印解除へのロードマップ

03.06.06、冷戦時代に倉庫の中に放置されていたかのようなアナクロ有事法制 3 法案が成立した。 法案成立を目指すだけなら与党 3 党だけで十分だったのだが、民主党、自由党を巻き込んで成立させたところに「意義」があった。政府は有事 3 法を集団的自衛権行使へのロードマップの中に位置付けている。法としての不備、アナクロ性は国家権力にとって本来の焦点ではない。有事 3 法制定過程を改憲翼賛体制構築の道具としたのである。米国の言う「対テロ戦」には様々な抵抗闘争、民族解放闘争含まれる(パレスチナを見よ!)。日本政府はこれ らを圧殺するための世界的体制構築を目指す米国の 意図に沿うように国内の整備を急いでいる。

03.05.30 付の東京新聞 2 面には『旗の次は「軍 靴を|集団的自衛権の封印解除 米がけしかける| という見出しが踊った。有事 3 法成立を受けて、 次のステップを踏み出せという米国の意志を伝える 記事である。これを受けてか、03.06.13、日本政府 はイラク特措法案を国会に提出(03.06.14 各紙)。 イラクに派遣された自衛隊は米英占領軍司令部の下 で活動することになり、戦争行為に加担することに なる一歩を踏み出そうとしている。派兵自衛隊の任 務には米英軍兵士、武器、弾薬の輸送も想定されて いる。対イラク戦争初期、「狙われた」のは補給部 隊だった。加えて、米英占領下のイラクの現状はど うか。バグダッド周辺でも米軍を標的にした攻撃が 相次ぎ、米中央軍が発表しただけでも、03.06.19 までの1週間で10件以上が発生。フセイン政権崩 壊後、悪化する日常生活にたいするイラク民衆の不 満は臨界点近くまで達しており、米軍のみならず NGO などへの攻撃も起き、無差別攻撃への懸念も 囁かれている。さらに、対イラク戦争に至る過程で 日本はイラク民衆から米英に次ぐ第 3 の敵とされ たことも忘れるべきではない。

こういう状況のイラクへ派兵するという日本政府 は武器自由使用、集団的自衛権行使に向けたキャン ペーンのため、自衛隊員の死体を必要としていると 言われても仕方がない。キャンペーンを成功させた いのならば、ブッシュを真似て軍服を着た小泉や石 破、安倍などがイラクに乗り込み、死体になればよ い。

日本に対する情報支配

防衛庁はミサイル防衛 (MD) 構想として、2 段階迎撃を検討、米国との共同研究の成果を待たずに概算要求へと踏み出した。米国が開発した MD 導入に踏み切れば、98 官房長官談話との整合性、支出済みの研究費が無駄となる。こうした動きに対して、集団的自衛権や数千億円といわれる費用対効果の面で疑問視する声も出ている。そして、ここに至る過程で米国による情報支配の一断面を見ることが出来る。

96日米安保共同宣言は情報共有化を打ち出した。「情報を共有化すれば、米側の認識がおのずと刷り込まれ、米国の行動への批判能力が薄れる」ことを危惧するのは外務省幹部。しかし、事態はそのように進展したようである。

02.02.17、訪米した石破防衛庁長官はクラウチ米国防次官補からブリーフィングを受け、直後のラムズフェルド長官との会談後、MDシステムを研究段階とする政府方針から一歩踏み出し、MDシステムの「開発・配備を視野に検討を進める」と表明。直後、フライシャー報道官が04年のMDシステムの限定配備に関する大統領声明を発表。

03.06.02 来日したウォルフォウィッツは「MD に対する日本の対応を高く評価する」とダメを押した。

03.05.23、日米首脳会談のため訪米した小泉首相は CIA などから受ける諜報情報ブリーフィングに 出席。彼の頭の中にどういう情報が刷り込まれたか?

いずれも、ジョセフ・ナイの言う「核の傘から情報の傘へ。情報支配」に合致した動きである。米国の情報支配戦略に懸念を抱いている日本外務省には 北朝鮮拉致問題で断続的に圧力がかけられている。

米国の情報戦体制に組み込まれる日本

米海軍大平洋艦隊の第1哨戒偵察航空団司令部が今秋、横浜・上瀬谷通信施設から世界的盗聴システム=エシュロンの日本拠点である青森県・三沢基地に移転する方向で最終調整に入った(03.06.06)。100人が勤務する同司令部は米海軍第7艦隊哨戒偵察部隊司令部を兼ね、三沢、嘉手納、ディエゴガルシアの各基地の哨戒機P3Cと電子偵察機EP3を運用し、米軍の情報偵察分野の機能は格段に強化される。三沢、嘉手納、ディエゴガルシアの3基地は米国の世界戦略の生命線であるといっても過言ではない。とりわけ、インド洋に浮かぶ英国領の小島ディエゴガルシア基地は冷戦時代から東南アジア、南アジア、中東を結ぶ米軍の世界的戦略拠点であった。そのディエゴガルシアと極東の戦略拠点三沢と嘉手納が情報収集に関しては一体となるのである。

哨戒偵察司令部移転と同時にハワイの上級司令部機能を三沢に移す案も出ている。移転によって司令部機能も強化され、米国防総省が進める米軍トランスフォーメイションの一環として、情報偵察部門での在日米軍の比重は飛躍的に高まる。こういうことを背景として、米軍の要請を受けた日本政府は三沢基地に2本目となる3000m級滑走路新設計画に着手しており、新たな偵察部隊が設けられるという指摘もある。

以上のような一連の事態の進展の口実とされているものが米国の対北朝鮮政策である。00 年 6 月の

南北首脳会談、クリントン政権でのオルブライト国務長官訪朝という朝鮮半島での緊張緩和の動きにブレーキをかけたのは明らかにブッシュ政権である。北朝鮮の「暴発」を煽り、対北朝鮮最前線からの在韓米軍後退を打ち出し、それによって日本に MD 構想を推進させ、在韓米軍には 04 年から 3 年間で1兆3000億円を投入し、パトリオット PAC3 など最新兵器を導入する。その背後に冷戦構造崩壊で窮地に立つ米国軍需産業の意志があることは想像に難くない。旧ユーゴ紛争でも見られたパターンである。米支配層はウォーラーステインのいう「軍事力による経済優位の回復」に全てをかけざるを得ないのだろう。

情報の傘を"破れ傘"に

情報支配を唱えるジョセフ・ナイが同時に提唱す るのは「ソフト・パワー」概念であり、それは「無 理やり従わせるのではなく、味方にする力」と定義 されている。彼がソフト・パワーを強調する根拠と しているのが、情報革命によって国境を超える仮想 共同体とそのネットワークが生まれ、非政府勢力(そ の中には「テロ」組織も含まれる)の地位が高まる という事実である。非政府組織は「巨大で重要な勢 力である。…人権から環境にいたる課題で、非政 府組織が米国の政策を決める原動力になっている」 とし、彼らと対抗するために米国はソフトパワーを 強めるべきだと言う。ただし、ナイがソフトパワー 一辺倒かというとそうではない。米国のハードパワ ーを前提とした上での「ソフト」なのである。ちな みに、現ブッシュ政権でナイに最も近いのがアーミ テージ国務副長官であり、対北朝鮮政策も含めてア - ミテージ・ナイ・イニシアティブとでも言うべき ものが作動していると考えてもよい。

米国の情報の傘を"破れ傘"にするには民衆の側がソフトパワーを強めることである。とは言うものの現在の日本でそれがどの程度可能なのか。かつてこの国で、世の中の動きより雨に降られ恋人に会いに行くための傘が無いことの方が有事だという歌が流行ったことがあった。また「カラスなぜ鳴くの?カラスの勝手でしょ」というのもあった。こういう歌が流行る背景と今日の状況は大きく様変わりしているのに、相変わらず歌の「精神」は生き続けているようだ。さてその上でどうするか。この点についての結論めいたものを書くことは控えておきたい。各自が自らの点検も含めた実践の中で回答を出すべきだと考えるからである。

重信さんとの交流コーナー

「民族」概念と言語学

计 邦

■検証を忘れたマスコミ

残念と言うより、当然と言うべきなのだろうか。 米国主導の新中東和平案――ロードマップが挫折 しつつある。米国は、その実現について今のところ はまだあきらめていないようだが、アリエル・シャ ロンが14の保留条件を付けていることなどから見 ても、イスラエル側に本気でパレスチナとの和平に 応じるつもりがないことは明白で、完全破綻は時間 の問題だと言えるだろう。

それにしても、日本のマスコミによる「自爆テロ」 という表現には辟易させられる。

自らの命をさらす危険の少ない戦闘機や戦闘へリ、 最新鋭戦車に搭乗し、砲撃や狙撃、空爆を繰り返す イスラエル兵士の野蛮な行為と、自分の命を投げ出 すことを前提とするパレスチナ人の絶望的な抵抗運 動をなぜ同列に論じることができるのか、私には理 解不能だ。

またマスコミは、「ユダヤ人とパレスチナ人の民族紛争」(時には「ユダヤ教とイスラム教の宗教戦争」という側面を、あまりにも誇張しすぎているようにも思われる。確かにそうした側面がないわけではなく、とくに民族紛争の局面は現代になるほど強まってきている。しかしそこにのみ焦点をすえると、「侵略者に対する先住民の抵抗」というパレスチナ側から見た本来的な問題提起が弱くなってしまう。また、場合によっては「反イスラエル」を「反ユダヤ」に置き換えようとする意図的な問題すり替えが起こりかねない(事実、イラク攻撃の最中に、「仏の反米・反戦デモ参加者にアラブ系の反ユダヤ主義者がいる」という報道があった)。

それでいて、「ユダヤ人とは何か」という根本的 な問題についてマスコミが深く検証した例は、ほと んど目にすることがない。自らの報道対象を掘り下 げる努力を放棄しながら、「自爆テロ」だの「暴力 の連鎖」だの「テロと報復の応酬」だのと、好き勝 手に言えるものだ。

■ハザール帝国とユダヤ

現代に至るまで、中近東の歴史は紛争の連続だっ

た。とくに、イスラム勢力が姿をあらわす直前の紀元7世紀前半、ギリシア・ローマ世界の直系相続人である東ローマ=ビザンツ帝国と、オリエント世界の覇者ササン朝ペルシャとが、積年の遺恨に決着をつけるべく最終的な全面戦争へと突入する。その過程で、ビザンツ領シリア、パレスチナ、エジプトはペルシャ軍に占領されてしまった。ビザンツ皇帝へラクレイオス1世は、帝国存亡の危機を打開すべく、622年――偶然にもそれはムハマンドのヒジュラの年でもある――彼は自ら軍を率いてアナトリア半島を長駆して黒海方面に抜け、いっきにペルシャの首都クテシフォンへと進撃してササン朝を全面降伏させるのだが、このビザンツ・ペルシャ戦争の過程で、ハザールなる一民族が歴史の大舞台に姿をあらわすことになる。

ハザール帝国ーー

紀元7世紀から10世紀にかけて、黒海とカスピ 海周辺に覇を唱えた幻の遊牧国家。

彼らはヘラグレイオス帝の同盟者として登場し、 北方からペルシャ、ペルシャ滅亡後はアラブを牽制 するビザンツ帝国の強力な友邦であり続けた。

ハザールは、同盟国ビザンツの国教キリスト教(東方正教会)と、アラブ人の奉ずるイスラム教双方からの布教合戦の間で揺れ動いた後、どういう理由からかユダヤ教を国教として採用するという、いささか奇妙な選択を行なった。ハザールはその後もビザンツの同盟国として、東西文化の狭間で存在し、8世紀には皇帝ユスティニアノス2世とコンスタンティノス5世の后妃を輩出するほど、ビザンツと親密だったにも拘らず、なぜかキリスト教を国教とせず、ユダヤ教を奉じ続けた。

だがハザールは10世紀、正教会に帰依しビザンツ皇帝コンスタンティノス7世を洗礼父にもつキエフ・ルーシ大公妃オリガの息子、スヴャトスラフ大公によって滅ぼされるという、いささか皮肉な結末を迎え、歴史の彼方へと姿を消す。

ところが消えたはずのハザールの名が、思わぬと ころで突然姿をあらわした。

最近の研究によると、現代イスラエルの言語イー

ディッシュの中に、明らかにハザール語起源と思われる言葉(例えば、「お祈りをする」という言葉)が見られるというのだ [広河隆一『新版パレスチナ』岩波新書]。シオニストやイスラエルのタカ派の主張によれば、ユダヤ人は「聖書時代から続くセム系民族」ということになっているが、ハザール人は明らかにトルコ・モンゴル系だ。そのハザール人の言語がイーディッシュに強い影響を与えているというのは、「ユダヤ選民思想」を掲げるシオニストらの主張を根底から覆しかねない可能性を秘めた、非常に興味深い事実だと言えるだろう。

実際、かつてアーサー・ケストラーが『ユダヤ人とは誰か――ユダヤ十三支族・ハザール王国の謎』の中で、ハザール人をヨーロッパ系ユダヤ人(アシュケナジ)の祖であるという説を展開したことがある。「ハザール=ユダヤ人」という説は、なかなか魅力的ではある。

■「ユダヤ人」とは何者か

一般的に考えると、パレスチナ人について定義する作業はそれほど困難ではないように思われる。ところが、対照的に「ユダヤ人とは何者か」という問いに答えることは難解だ。どのような書物を読んでも、ユダヤ人の定義について納得できるどころか、逆にますます訳がわからなくなってくる。

かつて J. P. サルトルは、ユダヤ人についてこう述べている。

「ユダヤ人とは、他の人々が、ユダヤ人と考えている人間である」。

だが、広河隆一氏によれば、この定義はキリスト教世界にのみ有効だという。確かに近代に至るまで、アラブ世界に、ユダヤ教徒はいても「ユダヤ民族」は存在していなかった。それは、キリスト教徒はいても「キリスト民族」が存在していなかったのと同じである。

一方、民族としてのパレスチナ人は、シオニスト 国家の侵略後に成立した新しい存在だと言える。それ以前にはただアラブ人がいただけであり、パレス チナに住んでいるという意味での「パレスチナ人」 が存在したにすぎない。しかしイスラエルの暴虐の 渦中で、彼らの意識が高められ、自覚的民族として のパレスチナ人が誕生したと言えるだろう。

ユダヤ人にしてもパレスチナ人にしても、どち らも極めて自覚的・観念的な存在だということが指 摘できるかもしれない。

■「民族」概念と言語学

かつてオーストリア・マルクス主義者のオットー・バウアーは、自著『民族問題と社会民主主義』の中で民族について、運命を共にすること=「共通性」に注目し、「地域」や「言語」ではなく「性格」、つまり民族を形成する個人の"意識"に求めた。

ん他方、カール・カウツキーは『民族性と国際性』においてバウアーを批判し、民族の概念規定をバウアーが否定した「地域性=領土」と「言語」に求めた。カウツキーの民族概念を継承・発展させたのが、ヨシフ・スターリンだ。

彼は有名な『マルクス主義と民族問題』において こう述べている。

「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の 共通性のうちにあらわれる心理状態、これらの共通 性を基礎として生じたところの、歴史的に構成され た、人々の堅固な共同体である!

彼の定義、つまり"正統派"——官許マルクス主義の立場から言えば、パレスチナ人は明らかに民族としての適合性をもっている。ところがユダヤ人については、「地域」=「領土」と「言語(イーディッシュはあくまで中欧を中心とする俗語であり、ユダヤ人の共通言語とは言えまい)」の点で、民族としての適合性を欠いている(欠いていた)ことになるのだ。

いずれにせよ、民族を学問的に追究していくことと、何らかの民族概念を実際の政治システム上の統治に反映させようとする試みは、まったく別次元のものであり、一民族と国家システムが一体化するのはある意味で非常に危険である。旧ソヴィエトやその衛星国家においては、実際にそうした一面的な民族観に基づく統治が行なわれた結果、多くの悲劇が生まれた。

同様に、シオニズムという誤った民族主義に依拠 するイスラエルでも、建国以来現在に至るまで、世 界でもまれに見るアパルトヘイト的差別統治が続い ているという事実がある。

世界中の言語学者たちは、こうした現実に対し、どのような評価を下すのだろうか?

投稿

米国の喉元・メキシコ 榎本武揚の夢の果て

を得た。

小林 忍

幕末、北上する薩長革命軍に対して、幕軍の一部 は函館五稜郭にこもり最後の抵抗をした。指揮官は 榎本武揚。降伏した榎本は新政権で働いた。近代化 に邁進する「国家」で榎本は、日本人の中米移住を 実施した。移住先は米国の喉元メキシコ。移民の大 半は旧幕軍武士といわれ、榎本移民と呼ばれた。

国内では会津藩など、やはり旧幕府側の一部が、 屯田兵としてアイヌの地・北海道に入植を始めてい た。ロシアと樺太・千島交換条約を成立させ、北方 防衛を固めた榎本は、地政学的にメキシコをどう見 ていたのだろうか。そして、夢の果ては。

現地紙に掲載した、古い記事(96年)だが紹介したい。

<第1回ブラジル移民を乗せた笠戸丸が出港する 10年前の1897年、榎本殖民団が初めてメキシ コの地を踏んだ。ペルー移民の2年前のことだ。そ れから13年後の1910年、サパタに指導された 大農解体を求める農民革命がメキシコ全土を覆った。 サパタ暗殺から10年後の29年、サパティズムを 綱領の柱とする国民革命党が創立される。これを継 ぐ制度的革命党によって現在までの1党支配が始まった。

隣接する米国はテーラーシステムに代表される耐久消費財の大量生産体制が成立、「アメリカ的生活様式」と称される消費生活の黄金時代を迎えていた。一方、中国、フィリピンなどアジアでは膨張を続ける大日本帝国と権益をめぐり緊張がましていた。

米州のみを支配化に置くモンロー主義は亀裂を広げ、太平洋正面の両背後で、次第に開戦の気運が醸成されだした。

この頃、メキシコは日本移民を禁じた米国への密 入国の中継基地となっていた。

「大半が男性。1万人以上の日本人がメキシコから密入国しました」

戦後に帰化した、帰墨二世と呼ばれる春日カルロス・パンアメリカ協会会長(58)は、メキシコの対日参戦にともなう日本移民の強制疎開が、かえって日系社会の結束と経済的成功をもたらした、と説明する。

「戦前は農民として各地方にバラバラに入植していましたが、戦中は日本人全員がメキシコシティ

に集められ移動を禁じられました」 そのため、現在でも約1万人といわれる日系人の 90%が首都のメキシコシティに居住している。首 都で時計屋、文房具などの都市自営業者としての経 済的成功と、二世の70%が大卒という高い進学率

戦後、67人の会員で墨国日系人会が発足。休会中の墨都日本人会と合同してメヒコ中央日系人会が 作られる。

5 4年には戦争中に凍結された日本政府の資産返却の受け皿として、メキシコ人も加えた日墨協会が創立される。これは各国に日系人会があるなかで、メキシコだけが日本政府の旧資産を日系人に返すのは「まずい」という日本大使館サイドの判断があった、といわれる。

「一世は主導権をなかなか二世に譲らない」

57年、春日さんは日墨協会内に二世と帰墨二世のグループ「成年会」を結成、70年の総会で一世からの「奪権」に成功する。70歳以上の戦前移民が約3百人、新一世と呼ばれる戦後移住者約5百人の純一世社会は、日系人社会と、最大時、3千5百人を数えた企業駐在員社会の狭間で、求心力を減退させていった。

「僕らは実際のところ、発言する場がまったく無 い」

隔週刊の邦字紙『にちぼく』4月1日付長老座談会では、3月10日に開催された日墨協会40周年祭について、「40年の協会の『歴史そのもの』に長老方が不満と疑問をあらわにしている」と書いている。

二世社会は「持ち家と自家用車」の夢を実現した と誇る春日会長は反面、「成功者は日本文化を持っ た人。現地化した人は、この国の為にもなっていな い」と、日系社会の分解を認め「中南米の日系人が、 確実に変ってきている」と危機感をみせる。

可否併せ持つ一世文化を制した二世が、被植民地 的文化の中でその死に水をを取らざるを得ないのは 悲愴な皮肉だ。

南米的と特徴付けて否定的に評価される文化は 「先進」を自認するヨーロッパ人によってもたらさ れた征服者のそれだ。

かつて、高度な文明と文化を誇ったネイティブな

アメリカ人が貧困・犯罪と同義で呼ばれる不幸な現 代。先住民と同じ血をひく日系人が将来、その呼び 名にどのような意味が付加されるだろうか。

中南米全域を支配した軍政。それを支えたまった く同じ勢力が、民政を同じ政治の舞台にのせた。ネ オリベラリズムのかけ声が呪文のように反復され、 市場単一化への疑問が封印されている。

急速に南下するNAFTA(北米自由貿易協定)が発効するその日、メキシコで再びサパタの旗が翻った。貧困の南部チアパス州を拠点とする先住民武

装組織・サパティスタ民族解放戦線が武装蜂起した。 先住民の決起でフライトマネーが逃避、テキーラショックと呼ばれる通貨危機を引き起こした。この蜂 起は南米全域を併呑しようとしたNAFTAの喉に 突き刺さった骨といえ、市場経済化の幻影を同時に 引き裂いた。

「三世の時代は"長"になれ」と号令がかかる 日系社会。東西の文化対立と南北問題が錯綜する中 米。次代の指導者はどこへ舵をむけるのだろうか。

読者からの声 ■

『オリーブの樹』 会費1か月分同封します。

ライラさん来てくださって良かったですね。誌 面から、法廷の空気がその後ガラッと変わったよう な感じを受けました。ありのままの人間が、そのま まで許されているというような印象を受けました。

パレスチナの平和が1日も早く実現されること を希います。

この方が、先に編集部に、証人丸岡さんに花を差し入れしてください、とお金を送って下さったので、調べて、面会の許されている親族なら可能なのかと依頼しましたら、それもだめで、結局丸岡さんが弁護士を通じて、差し入れ要請してきたジーンズのシャツを、そのお金で買って入れました。その旨報告しましたら、以下のようなお便りを受取りました。

お手紙拝見しました。何かとても申し訳ない気 持ちです。安易にお願いしてしまったことを後悔し ています。

それと共に、このような些細なことといえば些

細なことに、最善を尽くして下さったことに対して 驚きと感動を覚えました。

私自身も5月の初め、東拘の差し入れ屋さんに問い合わせたりなどして、書留で花代を送ればいいと教えてもらい、そうしたところ、やはり既決の人には入れられない、と返事と花代が戻ってきました。

ジーンズのシャツに使っていただいたとのこと、 うれしいです。残りもそのように使ってください。 本当にお手数かけてしまったことお詫びします。

でも、花ひとつ届けることができないのか、という思いは、新房のひどさとも重なって、何とも言われん気持ちになります。20数年前、泉水さんを解放してくれたことがとてもうれしかった。そのことが強く思い出されました。

早いもので、冬に花にめじろが来ていた枇杷の 実も黄色く色づき、食べごろになりました。

お身体ご自愛下さい。

いつも有難うございます。

2003. 6. 12

大阪府 [. [.

設稿。

シゲに捧げる「私小説」その22

山田 美枝子

五人でそのあと池ノ端まで、一台のタクシーに 無理に乗り込み、鰻屋に入った。全員でまた割勘 で、ビールと鰻の食事をした。詩真子が、

「うちは一人娘が嫁にいっちゃったし、墓を継ぐ 人間がいないけど、京助さんところは男の順くん がいるから、墓守を変わってくださいよ」

といった。春彦は機嫌よく、ビールを、

おいしそうに飲み干し、

「そう、この中で一番にあそこに入るのは俺だけ ど、そのあとはどうなるのかなあ、寺に収める金 も、施餓鬼だなんだっていろいろ大変だしなあ」 と呑気そうにいった。亜佐子が、かたい顔で、

「家は次男ですから、ほかに買いますから」

といった。戦争で死んだことになっている父親

の墓の話も、その父親の話も聞いたことがないか ら、亜佐子は自分の代で墓を作りたいのかもしれ ない、と私は思った。なにしろ節約して貯蓄をし ているらしかった。

ぎくしゃくした会話だが、一応みんな親族らし い行動が出来たことで満足気な顔になっていった。

鰻屋を出ると、春彦夫婦が地下鉄の湯島駅のほうに行く、と歩きだした。私は常磐線に乗るために上野駅に行くと、反対方向に一人で歩きだした、京助夫婦はまよっていたが、亜佐子の「お兄さんの方にいきましょう」という声がしたので振り向くと、私に背を向けて歩きだした。私はほっとした。京助と亜佐子夫婦はどうしても苦手だった。友達とはだれとでも人間関係が築けるが、親族にはいやな思いを抱かせられることが多かった。

上野駅に向かって歩きだすと、不忍池には蓮の 花が真っ盛りだった。私は嬉しくなり池のほとり に近付いた。お盆で日曜日のためか人々がくつろ いだ表情で池の周りのテント張りの店を覗いて歩 いている。古着屋の店先のきれいな緑色の丸帯に 目がいった。螺鈿細工の櫛と簪も並んでいる。同 じような櫛と簪を、私は一子の形見として持って いた。一子はよく私にいった。

「たけくらべの美登利みたいな娘にしたかったのよ。きもの着て、三味線抱えてお稽古にいくような生活させたかったのに、貧乏しちゃって」

しかしそんな生活は、ほんとうに私にはあって いなかったから、一子の勝手な幻想でよかったの だ。一子は江戸時代の庶民文化の残る日本橋の呉 服問屋の末娘の気質で、昭和を生きていた。

上野駅に向かって歩きだすと、ビルの壁面がガラス張りのビルが見え、そのガラスの中の一つ一つの箱のなかで、金髪やカラフルな服装の若者が思い思いの格好でマイクを手になにか歌っている。ガラス張りのカラオケルームらしい。異星人のように見える若者だがそれは娘のほしみの仲間でもあるのだ。

常磐線でまた北千住を通った。今度は右側に見える小菅の東京拘置所に目をやる。もうニヵ月すれば、シゲの誕生日だ、また差し入れにいこう、と思った。差し入れは、差し入れ専門屋の取り扱うものしかいれられない。くだものと缶ずめと菓子類だ。去年は花の中に吾亦紅を入れてもらった。地味な花だが、秋の枯野の侘しさが感じられ、風情がある。豪華な花束は他の人が入れるだろうと

思った。その花を入れた後、シゲへの誕生カード にひとつの俳句を添えた。「イコールの関係が好 き吾亦紅」という句を私はつくったのだ。それは、 シゲの娘でパレスチナから初めて日本にやってき た二十八歳のメイがテレビのインタビューに応え て、

「母はいつも、どんな人とでもイコールの気持で つきあいなさい、と教えてくれました。たとえこ ちらにアドバンテージがあっても、つねにイコー ルの気持を忘れないで」

としゃべっていたのが、とても私の印象に残ったのだ。そのテレビの中でのメイの様子も詳しく書き添えて俳句を添えたのだ。シゲはその手紙をとても喜んでいた。独房からの便りはいつも六枚にも八枚にもなった。私のほうは日常生活に追われてそうもいかず、俳画や水墨画を添えてごまかして文が少なかったが、その私の絵もとても喜ぶのだった。

メイはパレスチナに恋人を残してきた。でも今は、拘置所の母、裁判所での被告席に座る母をフォローすることを一番の行動基準にしている。素晴らしい娘だ。戦争のない日本で育ったほしみに同じような思いが育つはずはないのだが。

自宅に帰りつき、自分のために紅茶を入れた。 宏介はいつものように休日テニスの仲間と、テニスの勝負の祝杯を近くの公園のベンチであげてい るはずだ。

私は私の好きなフランスの小説、プレヴォの「マ ノンレスコー」を開く。この小説を書いたのが僧 衣を身にまとった聖職者だったことに感動する。

十八世紀の貴族階級の息子娘たちの乱脈な生き 方、生活感がなく、色恋のみしか考えていない非 生産的若者、娼婦型のマノンという魅惑的若い女 性は、老若の男を罪の意識なく、どん底に落とし ていく。

十八世紀に書かれた小説が二十一世紀の私の心を救う。マノンを愛するシュバリエデグリュの一人称の語りが、

「どうかこの命のちぢまるような物語を手短に おわらすことをお許しください」

といっている。誰でも、愛するということは命をちぢめるものなのだ。ほしみにこの小説を読ませるのは、マノン自身に読ませるようで、気がすすまない。

しかし読ませなければ、とも思う。(つづく)

重信房子さんを支える会とは

重信裁判は、「パレスチナ解放闘争との連帯を起点に、日本社会の変革を追求した日本赤軍兵士の重信房子さん」にかけられた、長期勾留を目的とする政治裁判と言えます。その為、公正な裁判を求め、社会の不正に疑問を持つ有志が集まり、「重信房子さんを支える会」として、01年4月より救援活動を始めました。 重信公判の争点は三つあります。

- ① 74年に〇さんが日本出国のために使ったとされる旅券偽造。
- ② 74年、フランスで不当逮捕されたメンバーの奪還作戦として闘われたオランダ、ハーグのフランス大使館占拠での逮捕監禁・殺人未遂。
- ③ 00年の逮捕時に使っていた旅券偽造。

重信さんは、③は認めていて、関係者に機会あるごとに謝罪を表明しています。しかし、①②については、 全くの無実として争っています。

私たちは、運動の柱を次の2点に定めました。

- ① 裁判維持に必要な救援実務とカンパ集め。
- ② 世直しを求める人々との語り合い、交流の場をつくる。「オリーブの樹」は、この目的のために発行しています。

次回公判目程

7月16日(水)13時15分(丸岡証人)

9月 1日(月) 13時15分

11月26日(水) 13時15分

7月28日(月)13時15分

10月 7日(火) 13時15分

()内は、証人名です。敬称略。

東京地裁 (最寄り駅 地下鉄 霞ヶ関) 104号法廷

傍聴券の配布は、開廷の約20分前です。法律を学んでいる学生が単位を取るために傍聴に来て、満席になることがあります。確実に傍聴を希望する方は、早めに地裁前に集合される方がいいでしょう。

後記

久し振りに、密かなファンの多いカラス天狗さんにも書いて頂きました。筆者は、皆様がご意見を寄せてくださるのを心待ちにしています。どうぞよろしく。

丸岡さんの健康が気になります。6月の公判では、いくらか元気そうで、ほっとしましたが、いつも健康第1に、残りの証言にどうぞ頑張って下さい。丸岡さんの出廷は、7月16日までの予定ですが、体調を考慮し少しずつ進むので、もしかしたら、7月28日も丸岡証人に出廷要請されるかもしれません。しかし、その後、彼に会えるのはいつになるか判りません。7月16日が最後になると考えて、どうぞ皆様、重信さんと共に丸岡さんを傍聴で支えてください。

ライラさんの証言集が欲しいと、既に注文を受けていますが、現在、調書の翻訳ミスの修正作業中です。 もう少しお待ち下さい。ご期待に沿えるものにしたいと、編集部では鋭意努力中です。

イラク後のパレスチナの状況は、アメリカ・イスラエルの強圧的な態度に有利な風が吹き、パレスチナの人々の叫びを消し飛ばしてしまいそうな気がするこの頃です。この流れに抗して、公正な平和を確立し、ライラさんと重信さんの晴れやかな再開が早く実現することを願わずにはいられません。(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋 2-8-16 石田ビル 4.階

救援連絡センター気付 「オリーブの樹」事務局

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの木

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 809-3687269 オリーブの樹

「正誤」表

第25号

①4P右下から11行目

憲法<u>改訂</u>→憲法<u>改悪</u>